ISSN 2435-4279

紀要

成安造形大学附属近江学研究所

第9号 — 2019

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE OF
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN NO.9 — 2019

目次

将来社会における社寺の可能性 ……3
—京都龍岸寺と東近江正福寺の取り組みを中心に—
加藤　賢治　成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

近江の懐をめぐる 3 ……13
石川　亮　美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

近江学研究所主催公開講座・近江学フォーラム会員限定講座　報告 ……25
成安造形大学附属近江学研究所

将来社会における社寺の可能性

―京都龍岸寺と東近江正福寺の取り組みを中心に―

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長　加藤　賢治

将来社会における社寺の可能性
―京都龍岸寺と東近江正福寺の取り組みを中心に―

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長　加藤　賢治

Name:
Kenji　KATOH

Title:
A consideration of the role of temples and shrines in society in the future, with a focus on Ryugan-ji Temple in Kyoto City and Shopuku-ji Temple in Higashi-Omi City

Summary:
Aging and population decline are serious problems facing many areas in Japan. What roles do temples and shrines play in places such as these? This report attempts to answer that question by examining a number of examples of the future roles of temples and shrines in such areas.

はじめに

現在、日本における寺院の数は七六、九三〇ヵ寺[一]で、近年よく比較されるが全国のコンビニエンスストアの総数五五、六七七店舗[二]よりもかなり多い数に驚かされる。ちなみに、神社の数は八一、〇七四社[三]に上り、寺院の数よりも多いという。全国の中学校の数が概ね一万校といわれていることから、平均すると一中学校区にコンビニエンスストアが五店舗、寺院が七ヵ寺、神社が八社あると捉えて良いであろう。

この数字が何を意味するかということを考えねばならない。現代社会においてコンビニエンスストアの機能は、飲食物や雑貨、日用品の販売などにとどまらず、ＡＴＭの利用や、宅配便の取り扱い、公共料金の支払い、そして近年では住民票の写しや印鑑証明などの各種公的証明書の発行まで可能な店舗も加わり多様化。日常生活に無くてはならない存在となって、現在も進化している。

一方で、寺院や神社の機能はというと、コンビニエンスストアとは比べものにならないと言わざるをえない。そのような現状の中で数の上で圧倒的に多い社寺をなんとか有効に利用する手段は無いのかという議論が起こって久しい。

ただ、各地に散在する社寺が、何もしていないかというとそうではなく、近年地域の核として取り組みが様々なかたちで行われているのも事実である。そしてもちろんではあるが、社寺の機能としては、数値に置き換えることができない「心の拠り所（信仰）」という大切な役割も備えている。

本論考では、活発な動きを見せる一部の寺院に注目してその取り組みを紹介し、将来社会に息づく社寺の姿とはどのようなものなのかということについて考えてみたい。

第一章　京都龍岸（りゅうがん）寺の歴史と取り組み ―

（一）龍岸寺の歴史

ＪＲ京都駅から中央改札口を出て西に向かって徒歩一〇分ほどのところに、浄土宗龍岸寺がある。[四]龍岸寺の寺史によると、安井算哲（一世算哲）（一五九〇～一六四七）によって元和二年（一六一六）に創建されたといわれ、その長子である渋川春海（二世算哲）（一六三九～一七一五）は、貞享の改暦に尽力し、幕府の天文方に任ぜられたことで知られる。龍岸寺の門前の通りは現在「三哲通り」と呼ばれているが、それは算哲の名から名付けられたという。

開基である一世算哲は、僧侶としては無名である

が、囲碁に秀でており、十一歳の時に徳川家康に謁見を許され、十九歳から毎年、家康の囲碁の相手を務めた。そして、六十三歳でこの世を去るが、その後、子の二世算哲は保井算哲、渋川算哲、渋川春海と改名し、父親の後を継いで万治二年（一六五九）に幕府に御城碁（おしろご）として初出仕した。二世算哲は幼少期から天文学に興味を持っており、江戸で算学や暦学を、京都では陰陽頭であった土御門家と親交を深め、これまで、誤差が多くあった中国の暦から日本独自の暦である貞享暦の採用に尽力した偉人であり、幕府から正式に天文方として採用されている。

江戸時代に活躍した優れた学者を輩出した家系が創始した龍岸寺。その伝統を今に受け継ぐ住職が池口龍法氏（一九八〇～）である。池口氏は、兵庫県尼崎市の浄土宗寺院の出身で、京都大学でインド及びチベットの仏教学を学んだ後、二〇〇五年から知恩院に奉職、現在も編集主幹として務められている。二〇一四年から、龍岸寺の住職となり、多岐にわたる活動が始まった。

（二）池口氏の取り組み「フリースタイルな僧侶たちのフリーマガジンの発刊」

池口氏が浄土宗総本山の知恩院に奉職されて少し経った頃、二〇〇九年八月に『フリースタイルな僧侶たち』というフリーマガジンが発刊された。フリーマガジンなので、無料で誰でもが手にとって読むことができる。これを編集したのが、池口氏である。

このようなフリーマガジンを編集しようと思ったきっかけは、仏教がオウム真理教などの新興宗教の印象と重なり、仏教寺院や僧侶たちが何をやっているのか、ある種の誤解もあり、正確に理解してもらえないという背景があった。また、当時はＳＮＳ（Social Network System）のような手軽に自分の行動を発信することができなかったこともあり、フリーマガジンを通して、寺院や僧侶が取り組んでいる最新の情報を発信することになったという。

一般の読者も、次代の仏教界を担う若手の僧侶たちも、このマガジンを読むことで現代社会におけるお寺の役割を考えるきっかけとなった。現在では、二〇一九年八月に創刊十周年を迎え五五号が発刊された。この記念号は池口氏から始まって、三代目の編集長が担当した。現在五六号を数えるこのマガジンは「経典をナナメから読む会」というイベントを開き、仏教は失恋に効くのかという議論や、日常の中で修行を体験するイベント「ブッダニア」の開催など、様々な取り組みにつながり、それらを発信し、そしてイベント参加者を増やしていった。

歌を歌う、芝居をする、ダンスをする、楽器を弾く、漫画を描くなど、若手の僧侶たちが自分の得意とする能力を使って、仏教を少しでも暮らしの中に入れ込んでいくということを続けてきた。

十年にわたってのフリーマガジンによる寺院と僧侶の活動報告は、マスコミを通じて様々なかたちで京都を中心としながら全国に発信され、ある程度寺院の今までに見られなかった前衛的な活動が珍しくないところにまでなってきたように感じると池口氏は実感している。そして、池口氏自身の活動も当然その紙面を豊かなものにしているのである。

（三）龍岸寺の取り組み「てら＊ぱるむすの活動前夜」

浄土宗龍岸寺住職の池口氏は「お寺には日本文化の精神が詰まっている」という。

お寺では建築にしても、家具や仏具でも、修理しようと思うと必ず伝統工芸を受け継ぐその道の職人さんに頼らなければならない。それは言い換えれば、お寺の内部は、数百年前の伝統を何らかのかたちで受け継いできたもので溢れているということである。本堂にあるものは、金箔、漆工、金工、彫刻など、少し視線を動かせば必ず何かを見ることができる。また、庫裡の座敷では、現代の一戸建て住宅やマンションの一室に見られなくなった床間や違い棚、掛け軸や扁額、香炉、生花などが日常的にその場に存在する。いわゆる室町時代以降の日本文化そのものがお寺には詰まっているのである。

そして、お茶や和菓子などがちょっとしたお休み時間に出されるなどすると、目で見る、手に持って触れる以外に、美味しい香りを楽しむ、味わうということまで体験できる。すなわちお寺では日本文化を五感で体感することができるのである。

そして、最も大切なことは、お釈迦さんに始まり、その弟子や高僧たちが千年も前から語りつないできた思想を学ぶことができるということである。

龍岸寺の本尊は阿弥陀如来である。阿弥陀如来の語源は「アミターユス」「アミダーバ」すなわち無

限の命を持つもの、または無限の光を持つものといわれている。無限の命を持つというのは、墓地に眠っている自分のご先祖の命と今の自分の命、そしてこれから繋がっていくだろう自分の子孫の命が繋がっているということである。

また、涅槃経や法華経では悉有仏性、すべてのものに仏が宿る、すべてのものが仏であるということが語られている。一見、不平等に見える社会の中で、深い悩みに溺れている人がいるかもしれないが、尊いお経の中では、人間も動物も、無情のものもすべて平等で同じである。今、たまたま、お金を多く持って裕福そうに見える人も、やがてはそうでなくなるかもしれないし、実際には幸せではないかもしれない。

池口氏は、少しでも多くの人に気軽にお寺に来てもらい、日本文化とともに、仏教の教えなどにも触れてもらいたい。そのように促すのが僧侶の勤めであると。

お寺文化に親しんでもらう活動の一つとして浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」があるのだ。

（四）てら＊ぱるむすの活動

池口氏は、第一章（二）で紹介した『フリースタイルな僧侶たち』を発刊する中で、メディアに報道され、世の中の注目を浴びることも僧侶としての一つの仕事であるとの認識で活動を続けてきたが、平成二八年（二〇一六）に始まったお寺での浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」の取り組みは、かなりの衝撃を世の中に与えた。

池口氏はこの取り組みを共著書「アイドルとともに歩む―ナムい世界をつくろう」[五]の中で「はたしてこれは、宗教をおもちゃにしたような通俗的なお遊びなのか、はたまた、宗教をつきつめていく方便なのか」と世間の評価が二分したと告白している。

龍岸寺では、平成二七年（二〇一五）から十夜祭、平成三〇年（二〇一八）から超十夜祭という念仏体験を取り入れたアートフェスが行われている。「十夜」とは、天台宗や浄土宗、時宗など念仏を重視する教団が開催する宗教行事であるが、龍岸寺およびいくつかの寺院でそれを現代に生かしたかたちでイベント化したものが「十夜祭」である。実質の企画運営は、美術系大学の学生が集まって担ってきた。

その十夜祭の企画を考える中で「お寺でアイドル」という発想が出てきた。池口氏は抵抗無く学生の提案を受け入れた。

そして、平成二八年（二〇一六）十一月に五つの寺院で行われた十夜祭の龍岸寺会場の主要企画として、五人の浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」が結成された。「衆生（ファン）と共に修行する」をコンセプトに、衣装や踊り、歌の歌詞などに仏教的要素を入れて、あまり寺院に関心を持たない人たちに向かってお寺文化を発信するという活動が始まった。

アイドル名となっている「てら」とは寺（テラ）とtera（テラ）＝一兆という単位と、「ぱるむす」すなわちpalms＝手のひらの複数形がかかっている。地球全体に存在する無数の生命体に対して、お寺に広がる無数の手のひらが手を取り合って合掌し、理想の世界をつくっていこうという深い理念につながっている。

メンバーは発足当時から入れ替わりがあり、現在は観音菩薩の化身である「観咲千世乃（みさきちせの）」、勢至菩薩の化身「勢崎至恩（せざきしおん）」、地蔵菩薩の化身「笈地（おいち）くらら」、月光菩薩の化身「月影（つきかげ）サラ」、日光菩薩の化身「日向慧満（ひなえみ）」の五名が正式なメンバーとなっている。

浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」は、十夜祭や超十夜祭などの仏教行事や、他のアイドルグループとともに行うライブ活動、そして単独ライブの開催などを中心に活動を続けている。

その上で注目したいのは、ライブ以外の活動である。仏教を身近に感じることができる双六遊びや、本堂に集まった人々と新しい音頭をつくってみんなで踊ることなど、常に仏教の教えや文化をもとにしたイベントが検討されている。

（五）お地蔵さん巡りのフィールドワークイベント

令和元（二〇一九）年十一月十七日（日）に宗教民俗学を研究しているということで筆者が特別講師となり「お寺の周りでお地蔵さんみぃつけた」という地蔵巡りのワークショップが開催された。「てら＊ぱるむす」のメンバーとスタッフが一緒になって企画したイベントであるが、ライブを伴わないイベントとして、また、お寺を出てのフィールドワークという珍しい試みであった。

参加者は、十一名[六]で「てら＊ぱるむす」のファ

ンの方々がほとんどであった。内容は、龍岸寺の付近にあるお地蔵さんの祠を三班に分かれグループで探し、地図に落とし込んでいくというものである。最終的には、本堂に戻り大きな地図にみんなでその場所を記入し、各祠の特徴や、出会った人との会話などを報告し合うという流れである。もちろん、筆者は宗教民俗学の視点で、京都を中心とした民間信仰である地蔵信仰についての話も所々に入れさせていただいた。

今回参加された「てら＊ぱるむす」のファンの方々は、①基本的に身近な存在としてのアイドルが好き。②仏教の次世代の活動に興味を持っている。③アイドルもお寺の雰囲気も気に入っている。という概ね三種類の嗜好を持った人たちに分けることができる。

当日収集したアンケートの感想欄には「フィールドワークも良かったが、講師の話ももっと聞きたかった」「普段気に留めていないお地蔵さんについて深く知ることができて良かった」「地蔵菩薩の地域密着の信仰や功徳を学ぶことができて良かった」「本地仏の説明をもっと聞きたかった」など、地蔵信仰や仏教に関する興味関心についての記述が多く見られた。また、今後「てら＊ぱるむす」と関連して開催して欲しいイベントがあるかという問いに対しても「花まつりに参加したい」「京都十二薬師巡礼をしてみたい」「比叡山延暦寺の散策」「お寺巡り」など、ほとんどの参加者がやはり仏教文化に触れるイベントの開催を望んでいた。ただ、忘れてはいけないことは、仏教に触れることと同時に身近なアイドルとしての「てら＊ぱるむす」メンバーとフィールドワークを共にする喜びがあることは、参加した筆者も十分に理解できた。

このイベントは、SNSを同時間帯に使用しながら、発信、拡散していたこともあり、今後このようなフィールドワークに参加するファンが多くなる可能性は十分あると想像できる。

今後このような活動が、どのように展開していくのかは未知数であるが、「てら＊ぱるむす」をプロデュースする学生たちは、龍岸寺を舞台に普段お寺という空間から遠い存在である人々を、お寺に近づける機会をつくっていることに違いない。

（六）池口住職の思い

池口氏は、寺院が古い慣習にとらわれない新しい取り組みに挑戦するときに大切なことは、「継続」であるという。大乗仏教の教えは浄土宗龍岸寺の檀家だけのものではない。寺院が何かを発信するときには、ぶれることなくしっかりとした方向性を持って続けていかなければならない。「てら＊ぱるむす」の活動も、学生たちがやりたいという気持ちを大切にしながら、多様な価値観を持つ人々が寺院を体感するという環境をつくるために積極的に応援してきた。先述の通り、活動をはじめた頃は、檀家さんをはじめ様々な人々から賛否を聞いたが、現在では、マスメディアの発信や、龍岸寺が発刊する「龍岸寺ファン通信」によって、ある程度世間に知れ渡り、檀家さんも受け入れてくれているという。

池口氏は、先祖から子孫へと無限につながる生命の大切さ、そして仏教思想を根底とした日本文化の素晴らしさなどを臨場感をもって多くの人びとに伝えたいという熱い思いがある。今後も、アイドルイベントの後方支援だけでなく、宗派を超えて、これまで以上に多彩な活動を重ね、寺院をより身近で、地域にとって必要な存在に近づけていこうと努力されている。

龍岸寺本堂で地蔵信仰について解説する筆者（撮影：三輪泰生）

てら＊ぱるむす単独ライブの様子（アートフェスタくさつ2019 草津市浄教寺にて）

龍岸寺境内にて解説する筆者（撮影：三輪泰生）

ワークショップ告知（てら＊ぱるむす公式WEBサイトより）

地蔵の祠をマッピングする参加者
（撮影：三輪泰生）

第二章　滋賀県における寺院の活動の一事例 ―

（一）滋賀県の寺院事情

前項では、京都の龍岸寺を中心に、現代の新しい寺院の取り組みを紹介したが、滋賀県ではどのようであろうかと調べてみた。京都は江戸時代に八百八寺（はっぴゃくやでら）と言われ、元々寺院が多い地域であり、各宗派の総本山である知恩院、東西本願寺、建仁寺、天龍寺、南禅寺、妙心寺、大徳寺などに加え、鹿苑寺、慈照寺、清水寺など多くの人々が参拝におとずれる寺院が集まっている。

一方で、滋賀県にも延暦寺や三井寺、石山寺など京都の観光寺院に匹敵する寺院もあるが、地域に根付いた小規模な寺院を各地域で見ることができる。

滋賀県の寺院数（宗教団体数）は、令和元年度の文化庁宗教年鑑によると、三、二〇五ヵ寺で、人口十万人当たりの寺院数が約二三〇ヵ寺と全国一位である。全国の寺院数七六、九三〇ヵ寺で人口十万人当たりの寺院数が約六〇ヵ寺に比べると、その数の大きさがわかる。

しかし、この数字は、寺院運営から考えると重くのしかかる。言い換えると単純に一寺院あたりの檀信徒数が全国一少ないということが言えるのである。加えて、滋賀県には、草津市を筆頭に大津市、栗東市、守山市、野洲市、湖南市など京阪神の大都市周辺の衛星都市（ベッドタウン）が多く存在し、新興住宅地に居住する住民は、一般的に古くから地域に根付く寺院の檀信徒となることはない。したがって、滋賀県内の一寺院あたりの檀信徒の数は全国規模で考えて、一層少ないということになる。[七]

また、浄土真宗本願寺派が発行している「第九回宗勢基本調査報告書」によると、滋賀教区の寺院収入は、年収三〇〇万円未満の寺院の割合が八三・七％と全教区の中で最も少ない地域である。同報告書に、滋賀教区の寺院の所在地は、農山漁村が七一・〇％であり、全教区の中で六番目に高い結果となっている。これはあくまで浄土真宗本願寺派の寺院に限られるが、滋賀県内の寺院は、他府県に比べて、年収が少ない寺院が多く、その所在地も農山漁村の集落内に多く見られると言うことができる。

しかし、一方で、寺院と檀信徒との繋がりの深さを見ると、これも同じく宗勢基本調査報告書によると、二〇年後に寺院を「護持できるか（大切に守っていくことができるか）」という問いに対して、「護持できる」と回答した滋賀教区の門徒（信徒）が三四・九％あり、全国平均の三五・八％に近い数値となっている。要するに、非常に寺院収入が低く、一ヵ寺あたりの門徒（信徒）数が少ないにもかかわらず、寺院に対して守っていこうとする思いが強いことがうかがえる。[八]

龍岸寺池口龍法氏が知る滋賀県内の浄土宗寺院を例に挙げると、非常に熱心な檀信徒の姿が見えてくる。その様子を次項で紹介してみたい。

（二）寺院と檀信徒の繋がりを見る

例えば、甲賀市の浄福寺（檀家数四一軒）と東近江市の圓光寺（檀家数三五軒）の二ヵ寺が、檀信徒の力（長年にわたる積み立て）で本堂の建て替えを行ったという事例である。[九] いずれの寺院も、「お寺とは、自分たちの先祖が大切に守ってきたものであり、それらをこの時代に終わらせることはできない。」「かつてお寺は住民の生活の中にあったが、それが薄れてきている。再建を機にもっとお寺を生活に近づけたい。」「お寺は心が落ち着き、阿弥陀様やみんなと出会える大切な場所。本堂を新しくして、今後四〇〇年、五〇〇年と地域の中心であってほしい。」などの声に代表されるように、巨額な再建費用による負担があったにもかかわらず檀信徒の厚い信仰心によって本堂の再建が行われたのである。

これらの地域では、おそらく様々な新しい地域の取り組みが生まれてくるはずである。

滋賀県の寺院の現状を考える時、一寺院あたりの檀信徒の数が少ないが、熱心な檀信徒の存在が見られた。しかし、新興住宅地が多いという中で、そこに暮らす人々の寺院との関係はあまり見ることがで

きない。少子化や地方の人口減少などから、高齢者の一人暮らしや子どもの教育の問題など、地域には様々な問題が山積している。

滋賀県においては、このような新興住宅地の住民を巻き込んだ寺院の取り組みの必要性なども考えなければならい。そういう意味でも、次項の東近江市正福寺の「サラナ親子教室」という取り組みは、将来社会の寺院の役割の一つの姿を提案しているように思うのである。

（三）正福寺の取り組み「サラナ親子教室」

東近江市五個荘伊野部集落に浄土宗箕作山正福寺がある。この寺院で十八年間、子育て支援活動を積極的に行っている住職がいる。関正見（せきしょうけん）氏である。関氏は、奈良県の浄土宗寺院の出身だが縁あって、二七歳の時にここ伊野部に入った。

伊野部集落は、四〇数軒の小さな集落で、すべての住民が正福寺の檀徒であり、同時に地域内にある建部神社の氏子であり、伊野部自治会の会員であるという非常にわかりやすくコンパクトなコミュニティーが形成されている。

関氏は、この寺院で、平成十五年（二〇〇三）から住職夫人菊世氏とともに「サラナ親子教室」という子育て支援を開始した。地域の同世代の人々とともに自身の子育てができ、同時にお寺という空間が交流の場となればという思いがきっかけであったとのこと。

活動の内容は様々で、十時ごろから挨拶や歌やお経、法話などのセレモニーの後、その日のテーマに合わせて、水遊びや、芋掘り、団子づくり、子育て悩み相談などが行われ、みんなでお昼ご飯を食べて終了となる（ちなみに会費は一日五〇〇円・お昼ご飯代とのこと）。

参加者（親子で参加が原則）は徐々に増え、一歳児クラス、二歳児クラス、三歳児クラスに分かれてそれぞれ月二回が平均の実施回数である。現在、毎月約六〇組が参加している。また、参加者の居住地は、開始当初は伊野部集落の檀徒の親子であったが、徐々に活動の情報が広まり、周辺の八日市や近江八幡の新興住宅地に居住する親子も増えてきた。

（四）「サラナ親子教室」の取り組みから見えてくるもの

現在、厚生労働省によると地域の子育て支援の拠点は全国で四〇〇〇ヶ所以上にのぼり、目的としては、急速に進む核家族化による子育て家庭の孤立を防ぐため、親子が気兼ねなく集い、つながりを持って子育てを共に考える機会を増やすことがあげられる。

しかしながら、運営母体は市町村の直営から社会福祉法人、ＮＰＯ法人への委託など様々であり、担当者の能力や実践方法によって得られる成果が一定ではないなど、問題を抱えているのが現状である。

そのような中で、寺院で取り組む子育て支援には様々な可能性が秘められているように思う。本来、仏教が悠久の時間を経て受け継いできた思想の中には、子育てや人々の繋がりをつくるための知恵が語られている。

また、第一章（二）で、池口龍法氏も語っていたように、寺院は日本の歴史や文化が詰まっている空間である。子ども達もそうであるが特に若い母親たちにとって、長期間、活動を続ける中で、自然なかたちで日本人としてのアイデンティティを育む機会となっている。寺院で行う子育て支援は、公民館や図書館、福祉センターなどの空間とはまた違った成果を期待できるのである。

「サラナ親子教室」のようす（1）

正福寺がある伊野部集落の様子

「サラナ親子教室」のようす（2）

東近江市五個荘伊野部の正福寺

第三章　将来社会の寺院のあり方

（一）サラナ親子教室の将来

関氏が、ここ正福寺で始めた「サラナ親子教室」とは、浄土宗総本山知恩院で生まれた、本山と末寺、そして檀信徒の繋がりを再構築しようとする活動の一環である。社会の変化によって、核家族化が進行し、先祖や親族との繋がりや信仰心の希薄化を食い止めようとしたのである。そのような背景の中で平成十年（一九九八）に「サラナ親子教室」はスタートした。「サラナ」とは古代インドパーリ語で「安らぎの場」「心のよりどころ」という意味がある。

関氏は、現在、正福寺の実績を認められ、親子教室の担い手を育成するサラナ親子教室事業推進の主幹の役割も担っている。結果として、現在、全国二一ヶ所の浄土宗寺院で、教室が運営されているが、関氏はまだまだ少ないと実感している。正福寺では、この教室を続ける中で、お寺が地域の中で開かれた存在になりつつある。関氏は、約四十数戸の地域住民の顔と名前が一致し、概ね家族構成もわかっているという。最近は、集落の人口も少し戻ってきた。これまでは、所帯を持つと他地域に移っていったが、敷地内に家を建てて三世代で住む家族が出てきた。これは、子育ての環境を含めた集落の住民の行き届いた配慮を土台とする居心地の良さがあるのではないかという。

集落の共有財産である裏山の里山復活運動や、田畑を使うことなど自然との共生を実現できる暮らしのあり方が見直されていることも考えられる。

日本全体の人口減少は、地方により大きな打撃を与える。地方で暮らすことの良さ、価値観の転換が必要であることは間違いない。地方の寺院が中心となり様々な取り組みを行うことが、大きな社会問題を解決する一つの手段であることは間違いない。

今回、関氏を取材して、地方の寺院が、その地域のよりどころとなるような、檀信徒と共に寺院が行う取り組みがより広がっていくことが望まれる。そのためにも、五個荘伊野部集落をより良い地域にすることに継続して取り組んでいきたいという強い意志を感じた。

（二）「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」という視点

今回の論考では、寺院の事例のみとなってしまったが、「将来社会の社寺の役割とは何か。」として神社も含めて考えてみたい。

滋賀県内の寺院が小さな集落内に少ない檀信徒を抱えながら現代社会に息づいている姿を見ると、近世のムラ社会の姿と重なってくる。近世の寺院の役割は、言うまでもなく大変重要であった。寺請制度によって、ムラ人として集落の一員となるためには、集落内の寺院の宗門改帳に名前が記載され、寺請証文を受け取らなければならなかった。要するにこれが今で言う戸籍であり住民票であって、それらを受け付け発行する権限を持っていたのが集落の寺院であった。[十]

寺院にいる住職は、識字率が低いムラ社会にあって文字が読め、書けた。同じ宗派の住職との連携も、多少はあったから、ムラ以外の情報も入ったであろう。そして、子ども達に文字や道徳を教授し、宗派の法要や宗教行事に合わせて飲食の振る舞いがあり、地方からやってくる芸能者の芸能を披露することもあったであろう。

住職は、檀信徒の悩み事、相談事に耳を傾け、本尊に対する信仰や地蔵講、観音講などの講というコミュニティを形成し、寺院の敷地内は様々な形で心の拠り所となっていた。また、寺院は、宗教的アジールのような空間であり、ムラを領有する領主や代官などのムラ以外の大きな組織の圧力から逃れることができる自由な場であったとも言える。

当時の寺院は、市役所の支所機能、子どもの教育、生涯学習、心のケア、芸能などの楽しみ、何事にもとらわれない考え方を持つこともできる自由な所であった。現代のコンビニエンスストアに対して比べ物にならない大切な場所であったのである。

一方、現代では、地方の市町村内にある小学校区を単位とした自治会組織の課題を整理してみると、人口減少と少子高齢化という大前提の課題から派生する、孤独な核家族世帯、高齢者の単身世帯などの増加、そこに子どもの教育、心のケアなどの福祉問題、地域経済の疲弊による地域の全体の寂寥感などが見えてくる。

このような課題の検証を目的として昨今では社寺というものが持つ「ソーシャル・キャピタル（社会

関係資本）」の分析が行なわれている。

ここで言う「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」とは、人と人が繋ぐ人間関係から生まれる心の豊かさなどを指す地域社会になくてはならないソフト面の資本のことである。

アメリカの政治学者ロバートパットナムは、「ソーシャル・キャピタル」の三つの要素として信頼（自発的な協力を生み出し、自発的な協力が信頼を増幅させる）・規範（相互依存的な利益交換から生まれる互酬性の規範）・ネットワーク（協力をもとにした個人や集団のつながり）とし、アメリカの地域における共同体の衰退についての論文でその重要性を訴えた。

寺院においては、一つの地域の住職と檀信徒の信頼と規範というつながりをもとにしながら、他の地域にネットワークを広げていくことが求められるとの研究報告もされている。(十一)

今回取材した京都市龍岸寺と東近江市正福寺。どちらの寺院も信頼・規範・ネットワークを備えた「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」という大切な資本を持って活動し、具体的に一つずつ検証したわけではないが少なくともそれによって幾つかの社会課題が解決されていた。そして、この二つの寺院以外にも、多彩な活動をしている多くの寺院の存在も知った。

寺院という空間には、宗派を超えて様々な文化や思想が詰まっている。一言ではもちろん、何日かかってもそれを全て説明することはできない。複雑で難しいから敬遠されてしまうとも言われるが、逆に考えれば無限の可能性を秘めている。特に人口減少、少子高齢社会の中においては、生命の考え方や、癒しなど、心のケアが語られるようになることが想像される。そのような事象を寺院が受け止めていく必要もある。

この項の冒頭でも述べたが、今回は、寺院の事例にかぎってしまったが、筆者は過去の論考の中で、神社の新しい取り組みを紹介している。(十二) 今後、地域に暮らす我々は社寺という貴重な存在を意識して、何かきっかけをつくって、門や鳥居をくぐってみる必要があろう。

謝辞

最後になりましたが、今回お忙しい中、取材にご協力いただいた龍岸寺住職池口龍法様、正福寺の住職関正見様、「てら＊ぱるむす」のプロデュースを手がける成安造形大学地域実践領域二年生三輪泰生さんにこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

参考文献

・大谷栄一編『ともに生きる仏教　―お寺の社会活動最前線』（筑摩書房　二〇一九年）
・桜井邦彦『人口減少寺院の底力』（興山社　二〇一八年）
・櫻井義秀『人口減少時代の宗教文化論』（北海道大学出版会　二〇一七年）
・相澤秀生、川又俊則編著『岐路に立つ仏教寺院』（法蔵館　二〇一九年）
・櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院　ソーシャルキャピタルの視座から』（法蔵館　二〇一六年）
・広井良典『人口減少社会のデザイン』（東洋経済　二〇一九年）

注釈

（一）令和元年度『宗教年鑑』による平成三〇年一二月三十一日現在の数値

（二）（一社）日本フランチャイズチェーン協会の令和元年十一月発表の数値

（三）令和元年度『宗教年鑑』による平成三〇年一二月三十一日現在の数値

（四）浄土宗龍岸寺：京都市下京区塩小路通大宮東入八条坊門町五六四番地

（五）大谷栄一編『ともに生きる仏教－お寺の社会活動最前線』筑摩書房二〇一九年

（六）参加者は全員男性。年齢層は三〇代から五〇代程度まで幅広い。熱心な仏教の信徒もおられた。

（七）総務省が二〇一九年七月に発表した住民基本台帳に基づく人口動態調査で、滋賀県の二〇一九年一月一日現在の人口は、外国人住民の増加に伴って前年より四四五人（〇・〇三％）増え、一四二万八〇人（日本人住民一三九万八〇六人、外国人住民二万九二七四人）だった。日本人は二二八二人（〇・一六％）減ったが、外国人が二七二七人（一〇・二七％）増えて二年ぶりの増加となった。年齢区分別では、年少人口（〇～十四歳）の割合が全国二位の十四・一三％、生産年齢人口（十五～六十四歳）も九番目に高い六〇・四五％で、他府県と比べて年齢構成が若い傾向が続いている

（八）櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院　ソーシャ

ルキャピタルの視座から』（法蔵館　二〇一六年）「第四章　信頼は醸成されるか　―浄土真宗本願寺派　那須公昭著」を参照

（九）総本山知恩院公式Webサイト内　華頂特集記事　本堂再建―檀信徒の決意―参照

（十）明治時代になると、これまでの寺請制度が廃止され、政府の方針によって、郷社とされる神社の氏子となることが義務づけられた。

（十一）櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院　ソーシャルキャピタルの視座から』（法蔵館　二〇一六年）「第四章　信頼は醸成されるか　―浄土真宗本願寺派　那須公昭著」を参照

（十二）加藤賢治著「寄人衆の役割に見る五箇祭～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例」成安造形大学附属近江学研究所紀要6号（二〇一七）

加藤賢治著「近江の〝サンヤレ〟から見えてくるもの―大津市真野の〝サンヤレ祭り〟と栗東市大宝神社の〝サンヤレ踊り〟を例に―」（二〇一八）

近江の懐をめぐる 3

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
石川　亮

近江の懐をめぐる 3

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　石川　亮

Name:

Ryo　ISHIKAWA

Title:

Omi's “futokoro” : Part Three

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as “techniques” and their “spirit” in order answer the questions, “Why have these particular techniques been preserved and passed down?” and “What special value were they perceived to encompass?” I will also look at why these examples are so limited.

「懐」とは、衣服に覆われた胸のあたり、その囲まれた空間の意のほか、周りを山などに囲まれた奥深い場所。外界から隔てられた安心できる場所。物の内部、内幕。所持金。胸中、胸の内の考え。など様々な意味が読み込める。

「近江」は都が造営される以前からいつの時代も歴史の舞台をかたちづくってきた場であり、真ん中に大湖を携え周囲を街道が行き交う交通の要衝である。まさに「日本の懐」と呼ぶにふさわしい場所と言えよう。

このような場で絶えず次の時代を予測し、新たな考えやアイデアを生み出し、受け入れイノベーションを起こす反面、伝統や独自性を重んじ日々工夫し知恵を出し合う。その精神が今日まで受け継がれ持続してきた場に他ならない。

そこに現れる一つひとつを取り上げていきたい。

「近江の懐」とは「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業（なりわい）」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場にある独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

３回目となる「近江の懐をめぐる」は２０１８年の暮、冬の中山道守山宿に始まり、２０１９年春、同じく中山道愛知川宿、そして空梅雨時期の北国海道（西近江路）門前町坂本と続き、秋の北国脇往還春照（すいじょう）宿の４回を紹介する。

この年の大きな特徴として二つ振り返ることができる。一つは平成から令和へと移りゆく年、平成最後の日に愛知川宿の訪問となった。２０１９年４月上旬に次の元号「令和」が発表されゴールデンウィークを境に時代がゆっくりと移り変わった印象である。対して私ごとではあるが昭和から平成に変わる頃を思い返すと、当時私は高校２年生、ラグビーに明け暮れる毎日であった。正月７日の高校ラグビー決勝戦を花園ラグビー場へ観戦に行く途中のことである。決勝戦中止、両校優勝の知らせを駅の放送で聞き昭和天皇崩御を知る。その数時間後に新しい元号「平成」が発表され目まぐるしく動いた一日であったことを記憶している。

二つ目は空梅雨（からつゆ）から始まった長く夏が続く中、９月から10月にかけて関東地方において史上最強とも呼ばれる台風15号、19号が東日本に記録的な豪雨をもたらした。主要河川の氾濫、堤防決壊を引き起こし甚大な被害をおこした自然災害の年と言えるだろう。幸いにして近江は大きな被害はなかったが自然

の脅威を思い知らされる年であったことは間違いない。

このような時代の節目と自然の脅威に遭遇した時期に共通した「懐めぐり」のテーマとして「再生」をあげたい。守山宿では道標のある角地にて昭和の文化住宅を利活用し、若手店主が立ち上げたナチュラルワインの店、愛知川宿は地域で長年愛されてきた料理屋が商人屋敷を譲り受け、料亭として利活用する試み、日吉大社では料理人の精神ともいうべき包丁の奉納、庖丁式について、春照（すいじょう）宿では縄文期から続く水利用とその変遷、近年の小水力発電に続く試みである。いずれも地に足をつけた近江人が、与えられた条件と環境に向き合いながら受け継ぎ「再生」に奔走するリアリティーに着目した。これも近江が持っている懐の深さが下支えとなっているからと言えるだろう。

一、守山の道標ワイン

「京立ち守山泊まり」と言われる守山宿、京都三条から江戸（東京）への一番宿として、また江戸から京へ上る中山道単独の宿としては最後の宿場町である。

２０１８年、暮れも迫り新年を迎える準備をされている人々の様子が見える中、守山宿を訪ねた。街道を歩いていると水路が縦横無尽に行き交うことに気づく。水面に視線を向けると川底がはっきりと見え透明度が高いのがわかる。守山宿の東に位置する吉身地区で看板を見つけた。「この辺り一帯を吉身という。古くは『吉身郷』とも呼ばれ、豊かな森林ときれいな『水』に恵まれた『天下の景勝地』であった。」と記されている。さらに京都方面へ進むと左手に「町家うの家」が見える。黒漆喰の壁は守山宿の象徴的な存在となっており平成24年に守山市歴史文化まちづくり館としてオープンしている。元は造り酒屋（その前は荒物屋）と、水が良いことから栄える条件が整っているように感じた。このような潤いを感じる守山宿の懐探しに迫りたい。

京都方面へ少し進むと直ぐ左方向へくの字に道が曲がる場所がある。くの字の頂点に石造りの道標を発見した。「右　中山道　并（ならびに）　美濃路　左　錦織寺　四十五丁　こ乃者満ミち（このはまみち）」とあり背面には江戸時代「延享元甲子年霜月願主（１７４４年建立）」と刻まれていた。付近に立つ看板には、「守山市指定文化財（民俗資料）石造道標…」とあり、昭和52年に指定されたことが記されている。いつものようにその道標を四方八方から撮影しているとファインダーの向こう、道標の奥に愛らしい家屋があるのに気づく。一旦道標から離れその建物に近づいた。木枠のすりガラスの引き戸の奥を覗くと木製の感じの良いテーブルに白ワインが置いてある。気になって入ってみるとニットキャップ帽を被った若い店主が軽く会釈して「どうぞ」と声をかけてくれた。店内にはワインがずらっと並びワイングラス、レコード盤、ターンテーブルとスピーカーセット、そしてワインや発酵に関する書籍などが整然と並んでおり、昭和の雰囲気を醸し出す白熱色のライトが店内を照らしている。じろじろ眺めていると鮮やかな青いタグがワインボトルにかかっており「wine shop AZURE BLUE」と記されているのに気づいた。若い店主は私がそれに気付いたことを察知してか、ナチュラルワイン専門の店であることを話しかけてくれた。次に「実はここがワインセラーになっています。」と土間の奥にある引き戸を開けてくれた。そこは昭和の文化住宅の居間を改造して湿度と温度調整を一定にしたセラーになっており、中にはイタリア、スペイン、フランス、ジョージア、ニュージーランド、オーストリアなどたくさんのワインが整然と並んでいた。その一つひとつにワインの名称、味の傾向、由縁と生産者などの紹介が丁寧にされていた。さぞかし高値のワインなのかと近寄ってみると二千円から五千円程度のワインである。安いとは言えないが買うことのできるワインである。店内を見渡しつつ数本ワインを手に取りながら店主の佐々木祐哉さんのお話を聞くことができた。

ここで売られているワインはナチュラルワインと呼ばれるものである。ナチュラルワインとは、自然に敬意を払い自然の力を引き出したワインをつくろうと、フランスを中心にひろがっている「ヴァン・ナチュール（自然派ワイン）」のことであり、英語で「natural wine」、フランス語では「vin nature」となる。それはぶどう栽培において有機栽培である

こと、手摘み収穫すること、ワインの醸造においては自然酵母により醸造、醸造時に二酸化硫黄（亜硫酸）を使用しない。使用したとしても、ごく少量に控える。補糖・補酸しないなどである。特徴としてはその年のぶどう、ワインの出来具合によって味に変化があることが言えるであろう。それは大量生産による味の調整などを全くしないことにある。またボトルの中での変化もあり、まさにナマモノであり、生き物であるといって良いだろう。彼の言葉を借りると「ワインは製品ではなく農産物と言えば良いでしょうか。生産者である彼等の徹底的なこだわりを大切にしたい。自分の表現に妥協しないそんな姿勢、哲学、生き方、が好きなんです。そしてそんな思いでつくっているワインを伝えたい、その考え方をみんなでシェアしたいんです。」と熱く語った。そして「僕がナチュラルワインに惹かれた切っ掛けとなったワインを飲んで欲しいです。」とワイングラスにそのワインを注いでくれると、この仕事を始める話や拠点を守山に決める話へと展開した。京都出身、以前は某ホテルでバーテンダーをしていたそうだ。客に提供するカクテルで自分を表現することから始まり、酒販店の仕事を経て石垣島へ、そこで感じた自然、星、泡盛、三線など島での人々との暮らしや経験が今につながっていると、そしてワイン専門店での仕事からナチュラルワインの世界を知る。「公私混同？　職住一体の生活ができないかと自分の居場所探しが始まり、中山道を自転車で北上して最初に見つけた物件がここなんです。」と、築60年の昭和の風情が残る場を見つけて即決したそうだ。ワインセラーは断熱材を入れ、自分にできる範囲の改装を大工さんと一緒に試みた。この店は２０１７年７月からスタートさせている。「今話しているこのテーブルで角打ちができる店にしているんです。」「角打ちとは買っていただいたワインを直ぐに空け、持ってきたチョコやハムをあてに、その場で飲むことです。」とまだまだ話は尽きない。数時間の取材中にも正月に飲むワインを買い求めつつ、暮れの挨拶をしにくるお客さんが絶えない。数ヶ月に一度はワインの会を常連客と開催したり、守山の食材とワインとのコラボレーション企画や生産者、農家、料理人、ＤＪ、映像作家が集まったイベントを試みるなど、クリエイティブなコミュニティスペースとなっている。テーブルの隅には連携する様々な生産者のきっちりデザインされたフライヤーやＤＭが並んでいる。そこには地域性と独自性を意識した持続可能な新たな生き方、ライフスタイルならぬクリエイティブスタイルを感じることができた。

　中山道、美濃路と、琵琶湖木浜港へ通じる分岐点の地に、新たな仕事の仕方や暮らし方へと舵を切る、創造と共有の場が展開していた。

店主の佐々木祐哉さんとナチュラルワイン

守山宿石造道標付近

吉身（吉身郷）の看板

温度湿度調整がされたワインセラー内

wine shop AZURE BLUE 正面より（左端に石造道標）

吉身付近を流れる水路

一つひとつのワインに丁寧に解説がされている

石造道標（守山市指定文化財）

角打ちのできる店内（左側の引き戸の中はワインセラー）

暮れの挨拶に来たお客さんを送り出す佐々木さん

二、愛知川の屋敷

国道8号線を北上し愛知川にかかる現在の御幸橋を渡るとすぐ右手に常夜灯が見える。更に進むと道が左へ大きく曲がり始めるが右側へそれていく道を進む。その先「中山道愛知川宿」と書かれたゲートをくぐると旧街道の雰囲気が漂ってくる。

２０１９年４月30日は平成最後の日、「令和」の元号が４月１日に発表されてから着々と新たな時代の準備がされ、10連休で世間は活気づいているが、それとは別に街並みはひっそりと新年を迎えるような不思議な空気感に包まれているように感じる。しばらく歩くと２０１８年８月に旧近江銀行愛知川支店を利活用した洋館「中山道愛知川宿街道交流館愛知川ふれあい本陣」に到着した。あたりを見回すとそれぞれ柄の違う暖簾が軒先にかかっており、個性あふれる表現が地域の人々による賑わいを感じさせる。

「中山道宿村大概帳」によると、愛知川宿は天保４年（１８４３）の宿内家数は１９９軒、うち本陣１軒、脇本陣２軒、旅籠28軒とされる。問屋跡、高札場跡の石碑も立ち、江戸時代より続くと思われる老舗が数軒並んでいる。今に続く景観、そして建物の大きさから当時の近江商人の隆盛を想像しつつ愛知川宿の懐に迫りたい。

本陣跡を過ぎると愛知川宿北入口碑がある。このあたりから中宿（なかじゅく）と呼ばれる地域になる。江戸へ向いて右側に私の目測であるが間口が10メートル奥行きは30メートルほどあろうか相当大きい敷地が目に入る。周囲を黒い焼杉板塀で囲み、主屋を中心に蔵もいくつか数えることができる。「近江商人亭」の看板を目にしながら吸い込まれるように中に入った。横に国登録有形文化財のプレートが付いていることに気付く。玄関の戸を少し開けて声をかけると若い男性が快く招いてくれた。男性の話によると最近は中山道を歩く人が増え、旅ゆく人に屋敷内をご案内されているそうである。元々は近江産の麻織物で蚊帳などをつくっていた場所とのこと、現在は湖魚や季節料理をだす完全予約制の料亭であると話された。大体はそこまでが旅人への通常の話だそうだが「懐探し」の私がこのまま引き下がる訳がなくこのまま深入りすることになった。

まずはこの建物であるが旧田中家住宅として２００８年11月に国登録有形文化財に指定されている。近江商人の中でも愛知川の商人は明治以降の近代にピークを迎える。その豪商のひとつ田中家の「田源」は文化13年（１８１６）愛知川村中宿にて天秤棒を担いで蚊帳や麻織物の商いを行った秦荘出身の田中源治広次によって始まる。現在、東京日本橋堀留町に本社をおく老舗呉服問屋「株式会社田源」の原点となる場所である。屋敷は既に明治25年（１８９２）に建てられていた南土蔵を再利用しながら、大正８年（１９１９）に主屋を新築し、続いて茶室、北蔵、大広間を建設、庭園を整備し、現在の屋敷構えが完成している。

それではいつからこの料亭になったかである。お話を伺っている男性、近江商人亭三角屋（さんかくや）中宿店の東（あずま）範彦（のりひこ）さんに引き続き詳しくお話を聞くことができた。手入れの行き届いた庭が見渡せる座敷にあげていただくと床の間には素敵な軸装画が目に入った。この辺り出身の江戸期の絵師による作品であることはすぐにわかったがここではとどめておきまたの機会に紹介したい。

三角屋というのはこの料亭の屋号である。範彦さ

んの祖父の時代、戦後まもなく、愛知川宿中心部の脇本陣跡の向かい側、問屋跡の地に冠婚葬祭の行事や催事を行える場として料亭を構える。その当時では真新しい鉄骨建築（現存）が建てられた。その後、都市部に大手の結婚式場やホテルでの婚礼が主流になるまでは三角屋さんが地域の人々や家族が集まる場をつくっていたようだ。

一方、旧田中家住宅は東京、京都を主な拠点としつつも田源の社長本宅として長らく使用されてきた。その後、地元画家のアトリエなど借家として活用し、１９８０年範彦さんの父親の時代に直接譲り受けることになる。それから15年後の１９９４年に屋敷を利活用する形で「近江商人亭」がスタートする。そこでの料理はこの地域で以前より食されている湖魚料理である。中でも先代から続く「鯉の煮付け」は現在も健在である。鯉を筒切りにし、身の内側の臓物、卵を残したまま醤油、砂糖、みりん、酒で煮付けた郷土料理だ。仕入先も先代より続く近江八幡の「魚膳」より届けられる伝統を継承している。この辺りでは鯉は今でも日常的に各家庭で食べるそうで、近くのスーパーでも普通に販売がされている。また季節物であるがモロコの素焼きにドロズ（酢味噌）をあえて食べるなど琵琶湖に近いこととその風習が続いていることがよくわかる。それらを会席料理に組み合わせて出されている。東さんは地域の集まりや法事など近江商人の残した風景の中でもう一度その姿を取り戻すべく、食を通して場の再生を企てておられるのであろう。最近では年に二回程度であるが滋賀県出身などの落語家を呼び、食事と共に寄席を企画している。街道沿いに住む昔からの地域住民と新興住宅地に越して来た若い世代、さらに寄席や落語好きの層など、食文化と笑いの文化を通して新たな交流の場をつくっている。また２０１４年に公開された万城目学原作の映画「偉大なるしゅらぽん」のロケ地になり愛知川の近江商人屋敷を発信している。

話は三角屋に戻るが私がどうしても気になるのはこの屋号である。もう少し深入りすると問屋跡の更に京都側に旧旅籠で今は料亭の竹平楼がある。その路地を挟んだ向かい側に小さな三角の土地があったそうだ。どうやら一番最初はそこでうどんやそばを旅人に出す屋台のようなお店を出されていたのがこの店「三角屋」の始まりだそうだ。現在その土地がどこに当たるのかはわからない。店の創業起源も全くわからないようだが、数年前その近辺の荒物屋一久さんに証拠となる物が出てきた。それは明治期の木版画の広告で「明治21年略歴、愛知川三角やのそば十」と書かれた広告が発見された。唯一見つかった店の存在を知る資料であり、現在は料亭の調理場入り口付近に額装され展示されている。後からこの荒物屋さんを訪ねると店主が当時の木版画広告や筆書き広告をたくさん収集し残しておられることがわかった。店内の壁にもそれらがあちらこちらに貼られてあり独特の雰囲気を醸している。おそらく今日で言う「何でも屋さん、コンビニ」であろうか、この町の情報の溜まり場が荒物屋一久さんであり、愛知川宿の中心部の賑わいを滋賀銀行や竹平楼さんと共に担っていたのであろうと想像した。また田源から三角屋への屋敷譲渡に関してであるが東さんの話では父親の代に至ってスムーズに行われたと話された。あれだけの土地と庭、そして屋敷を高額で希望した人は他にたくさんいたであろう。私の勝手な想像であるが田中家が三角屋、東家にあとを譲った理由がわかるような気がする。三角の角地で創業してから地域での信頼を得て躍進した三角屋。先に愛知川の土地から出発し成功を収めた田中家が、一旦、時代の渦に巻き込まれながらも地域の持続に貢献し続けた三角屋であるからこそ愛知川商人の精神を受け継ぎ、譲れる相手として選んだのではなかろうか。東さんに起源や譲渡など多くの質問を投げかけたがわからないことが多い。しかし荒物屋一久、田源、三角屋などのそれぞれが断片的に持っている情報を紡いでいくと地域の繋がり、コミュニティの深層が世代を超えて引き継がれ見えてくるような気がする。その再構築が近江商人（亭）屋敷で新たな展開が始まっているのではないだろうか。

中山道より旧田中家住宅を望む

三角屋の看板が写る資料（協力：中山道愛知川宿街道交流館）

明治期に創業していたことを示す三角屋の広告

旧田中家住宅（近江商人亭三角屋中宿店）玄関

鉄骨建築時代の三角屋（問屋跡付近）

今後の展望を話す東範彦さん

手入れの行き届いた庭

三、拠り所、日吉さん

２０１９年は食に携わることが何かと多い。成安造形大学附属近江学研究所の公開講座にて近江八幡の料理人、川西豪志（かわにしたけし）氏の講演を行った。主に和食がもたらす日本文化の有り様をみながら、郷土料理や地産地消の食こそが我々の暮らし、文化を形作っていることを改めて認識する内容となった。川西氏を担当取材し、主に琵琶湖とその周辺における農家や漁師との関係から持続する食、復活する素材、未来展望など講座内で語り合った。そこで触れることができなかった、毎年6月初旬に日吉大社で行われる庖丁式（庖丁まつり）について「近江の懐」で取り上げたい。

庖丁道は平安時代から続くとされる。魚介類や鳥類、農産物など、料理に供される食材に感謝するため、神前、仏前で庖丁式を行い、技と共にその精神を伝承している。日本庖丁道清和四條流の式庖丁の由来によると、「一般に調理人としてあらわれるのは室町時代であり料理の流儀もその頃からとされる。江戸時代から式庖丁は、料理人の表芸となり、天皇、将軍家の御前で厳粛に庖丁をするのが恒例の行事とされる様になる。様々な諸派、流儀がある。清和四條流の伝統的な切り型には魚介類や農産物など約50余種があり、奉納される御供物には一切手を触れることなく、箸と庖丁のみを使い、切り上げ盛り上げます。」と記されている。

木版画の広告写し（荒物屋一久 店内）

鯉の筒切り煮付け（協力：東範彦さん）

２０１９年は6月6日に行われ、当日の西本宮前には滋賀県内の料理人達が腕を振るい献上の御供物が並べられていた。その様子は展覧会さながら料理人がテーマを決め自身の表現に取り組んでいる様に私には映った。拝殿では雅楽と舞により厳かな雰囲気の中、大勢の料理人が参列して式が始まった。いよいよ川西氏が拝殿にあらわれると用意された俎板には御供物の魚が用意されている。左手の箸で魚を支え、右手の庖丁を大きく振り翳す様子から緊張感が伝わる。一つひとつの所作が料理人としての食に関する感謝の意を表現している様に思えた。

供物を奉納して祭典が終了した後、一行は西本宮を出て直ぐの場所にある大宮竈殿社の裏側に向かう。そこには石碑が立っており、地面に何かを入れる様子が窺える。古くなった庖丁を納める庖丁供養である。石碑には庖丁塚と彫られ注連縄が巻かれていた。何とも不思議な感覚になった。式に参列した料理人達の庖丁を納め帰途に向かわれた。その後、社務所近くを歩いていると大役を終えた川西氏に会うことができた。ホッとした様子で「今日のは鮒寿

司でした！」と御供物が通常の鯉ではないことを教えていただいた。自身の生業を成立させている道具（庖丁）にも命、神が宿りそれが自身を生かし、生かされていることへ敬意を払う料理人の熱い思いを垣間見た。

後日、再び日吉大社を訪れ、禰宜（ねぎ）の須原紀彦（すはらのりひこ）氏に年間の祭典行事についてお話を伺うことができた。

２０１８年11月10日に発行した『日吉大社大年表』を紹介いただいた。古代、中世、近世、近代・現代と分けられ、須原氏自身も編纂、編集に携われた本編２１９頁ハードカバー「これで全てと到底言えませんが…」と話されながらも現在わかっている事をまとめた貴重な資料である。

記録によると庖丁まつりは「昭和56年5月29日庖丁塚を大宮竈殿社裏に設け、同年6月23日に清祓を行う。」続いて「6月24日 俎板祭りを行う。」とある。次の記録は「平成5年12月5日 庖丁塚整備工事が竣工して清祓を行い、清和四条流家元による庖丁式が奉納される。」続いて「平成6年6月12日第一回庖丁祭を西本宮にて行う。以後、恒例とする。」と記されていた。歴史は浅いがそもそも祭りの原点は神饌を奉納することにある。ここに滋賀で料理を生業にする人々の畏れ敬う気持ちが形になり食が日本の文化であることを伝えていると改めて感じた。ではこの様な一種独特と思える様なお祭りは他にあるのか、須原氏は私の問いに一瞬戸惑いながらも少し考えて日吉大社年間祭典一覧表を見せてくださった。そこには定例で行われる1月から12月までの31の祭典（但し、山王祭は1と数える。）に加え、各月毎に行われる祭典44、計75の祭典が記されていた。そこで3月に行われる牛神楽祭と5月と11月に行われる献茶祭を取り上げていただいた。牛神楽は田畑を耕す牛に感謝の意を表すもの、今日では想像も困難だがこれも自然と共存する生業に関わる。献茶祭はやはり日本最古の茶園の地にあやかってであろう。また以前行われていた祭典として植樹祭を取り上げられた。今日では林業に需要がなくなり廃れてしまったのであろう。いずれをとっても日本の食、茶、生業に関わるものに対して敬意を払う気持ちを庶民は絶えず心がけ、自然との調和を図ってきたのであろう。大学で学生と取り組むマルシェを企画する授業がある。その学びは、地産地消、食品ロス、近場で調達するエネルギー資源の問題など、身の丈でできることへの追求があり、それとも繋がってくる。その後、須原氏と庖丁塚に向かい新しい紙垂に交換するのを手伝った。

大社（おおやしろ）の日吉は現実社会に生きる庶民の拠り所でもあり、支えられて今日があるのであろう。神社が自然と人間のバランスを保つ役割を果たしているのではないかと考えた。

川西豪志氏献上の鮒すし

大宮竈殿社裏にある庖丁塚

庖丁塚（日本庖丁道清和四条流平成5年建立）

庖丁式を執り行う川西豪志氏

庖丁塚の裏にある庖丁を奉納する箱

役を終えた庖丁が奉納されている

四、春照（すいじょう）の水

春照といえば迷わず「水」である。

２００８年から２０１２年頃、私は滋賀県の湧水の地を訪れ、汲水（きっすい）する試みを通して作品制作に取り組んだ。伊吹山麓は湧水が多く周辺環境や湧き出る様子、地域背景に驚き自身の制作や研究の幅を広げていくきっかけとなった場所と言っても良いであろう。特に驚いた湧水としてこの地域の二つの湧水「臼谷（うすだに）の湧水（春照の泉）」と「小碓（おうす）の泉（間田湧水群）」があげられる。地表の裂け目とも呼ぼうか、段差のできた地形、その窪み一帯からふかふかと水が湧き出ている。周辺一帯は潤いに満ち、土地の低い方へと自由に水が流れていたことを記憶している。また伊吹の山間から流れ出る姉川付近には「小田分水（やないだぶんすい）」と呼ばれる、地域の農業用水を分配する基点となる場所がある。以前は湧水の着目に留まったが「すいじょう」の懐まで潜水してみたい。

２０１９年10月、久しぶりにその現場に向かう。北国脇往還春照宿の中心を本陣、脇本陣、高札場に据えて考え、そこから北西方面進むと八幡神社道標が見えてくる。「右　北国きのもと　えちせん道　左　ながはま道」と案内される。右に進み神社を過ぎると木立が増え民家と畑が所々点在する風景になる。林の方へ入ると一段低い土地が見える。獣害防止フェンス（以前は無かった）で仕切られた中に、その地表の裂け目「小碓の泉」は存在していた。記憶の通り岩肌の隙間からふかふかと湧き出ている。水の流れる方向へ目を追うとセリやクレソンが自生しており自然のままの状態が保たれていることがわかる。道標へ戻って今度は左へ進むと新道との交差点左側に少し低い土地がある。段差の低くなった場所、古木の根っこあたりから「臼谷の湧水」が湧き出ていた。小碓の泉同様自生する植物が生い茂り、整備されてはいるものの過剰にならない自然な状態が保たれている。以前とさほど変わっていない感を受けたが、ここも獣害フェンスが設けられ、扉を設置して出入りができる様になっていた。今日どこの地域でも共通に抱える悩みであることがわかる。

湧水の確認はさておき、春照宿から南東方面へ鍵曲がりから外れ、少し進んだところに伊吹山文化資料館に向かう。高橋順之学芸員に地域の水に関わる話などをお聞きすることができた。まずは春照の地名由来であるが、昔「水上」と記されていたと伝わっている。その頃、度々大火にあい困り果て伊吹山で修行する役行者に相談したところ「地名が悪い、水の上では火事が多い」とのことで村名を改めたと伝わっている。また鎌倉期、大原荘の佐々木氏（大原氏）の一族が春照（拯）氏を名乗っていたことに由来するそうだ。この地域の水利用について明治期の『滋賀県物産誌』によると「水利不便ニシテ米穀ノ収穫少ナシ」とあり、実は水に恵まれない土地であったことがわかった。伊夫岐神社から姉川の水を取水した「出雲井（いずもゆ）」の灌漑用水を利用する大原荘15村に所属し、岡神社（間田）に雨乞いの太鼓踊りを共同で奉納していたとある。集落は扇状地の扇端部（伏流水が再び地表に湧き出る場所）のやや内側にあることから「水上」であったことを示し、水の上にありながら水利に不便な場所であった。このほか江戸期に彦根藩の援助を得て修築された春照瑠と呼ばれる溜池がある。主につるべ式の井戸に頼り、１９９１年の調査では57カ所が確認されている。２０１１年度の春照地区新市交流のまちづくり基盤整備事業では春照の「井戸」探検隊による調査結果としてマップが作成されており、24ヶ所の井戸が確認されており詳細がまとめられている。

さらに「出雲井（いずもゆ）」「小田分水（やないだぶんすい）」についても伺うと２０１６年11月に姉川沿岸土地改良区によって発行された『姉川水利の歴史』を紹介いただいた。出雲井堰（いずもゆ）は１３００年ほど前に出雲国の人が水路を姉川から引き、開墾地へ灌漑したと伝えられている。姉川に設置された出雲井堰は１９５０年のジェーン台風がもたらした洪水で壊滅したが、１９５３年に姉川合同井堰として生まれ変わった。現在は伊夫岐神社あたりから姉川の南側を並行して水路が走り、小田（やないだ）の八幡神社を過ぎたあたりで３方向に分水され公平に農業用水が行き渡るような仕組みになっている。基点となる場に神が鎮座しているが水利権の分配をめぐって論争が絶えなかった歴史がある。小田分水を眺めていると道を挟んだ反対側に湧水探索の頃には無かった設備が目に入ってきた。小田分水から北西方向へ落差を利用して水車を回し発電させる落差工と呼ばれる小水力発電施設（２０１７年９月運用開始）である。これに関しても高橋学芸員を通

して地域で関わりのある水源の里再エネ実行委員会事務局長の膽吹邦一（いぶきくにかず）さんにお話を伺うことが出来た。当日は風水害を想定した防災訓練を地域の方々と取り組んでおられた。お話を聞くと今年の3月まで姉川土地改良区で農村地域における小水力発電等の導入促進、県営再生エネルギー施設設備事業に取組んでおられたことがわかった。小田落差工からの発電は「売電のみならず灌漑用水利用に還元する仕組みにしていきたい。」という思いを持っておられた。更に「エネルギー事業というのはもっとロングスパンで考えるべき問題」という持論も持っておられ、我々の今日社会の在り様から未来社会をどのように見据えるのかなど、古く縄文の時代からこの地で生き抜くため水をめぐる様々な問題が現在まで繋がっていることが膽吹さんのお話を聴きながら少しずつみえてきた。

2019年10月はこれまでの想定を超える大きな台風が関東東北地方に甚大な被害をもたらした。我々の先人は自然と向き合いながらも水、エネルギー問題と直面し様々な工夫をしつつ今日まで持続してきた。しかし急激な自然環境の変化に見舞われる今日、考え方において大きく舵を切る決断を迫られているのかもしれない。小さなことを積層しながら価値の転換をする。「すいじょう」水の上の街道を歩きながら考えを巡らせた。

春照八幡神社道標

小碓の泉（間田湧水群）

姉川合同井堰と伊吹山

臼谷の湧水（春照の泉）

春照の「井戸」探検マップ

小田分水と伊吹山

小田落差工（姉川エコ発電所）

追記

2016年12月より滋賀県文化振興事業団（2017年4月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に〝近江の懐〟と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たなる価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。2020年1月現在まで12回の連載が継続されており、2019年1月より2019年10月までの第9回から第12回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。

紀要の冒頭は2019年の二つの大きな印象として「平成から令和に変わる時代の節目」と甚大な台風災害に見舞われた「自然の脅威を思い知らされたこと」を振り返った。またそのことから「近江の懐をめぐる」の共通テーマとして「再生」をあげた。

繰り返すが守山宿のナチュラルワインの店と愛知川宿の料亭は街道沿いの町並み景観に敬意を払い利

活用を試みている。双方の共通点はその建物を愛で、そこで出されるワインや食材の出自、考え方を物語化し伝え、新たなコミュニティ形成の場づくりを目的としている。それは生業を起こす店主の精神が新たな「再生」を示している。日吉大社の庖丁式は料理人の生業を成り立たせている包丁に焦点を当てた。それは料理人の腕、心、精神そのものであり決して捨て去ることのできないものである。ここでも庖丁塚に古くなった包丁を納めること、その一連の儀式を社で執り行い、関係する料理人が一堂に集まることで「再生」を祈願している。最後に伊吹、春照宿周辺は姉川の水利用に関しては長年工夫し続け地域を潤してきた歴史がある。その工夫や活動自体が地域の文化や暮らしを形作ってきたと言って良いかもしれない。地域の力で自ら整備してきた歴史から、次世代に向けて水流を活用する小水力発電に着手へとつながっている。そのエネルギーを活用して農業用水のコントロールに挑戦する文字通りの「再生エネルギー」事業である。

近江は長年培われた文化と、新たな考え方や方向性が絶えず拮抗しながらもより最適な道を歩んできているように思う。そこには必ず主要なキーパーソンが存在し、またそれを支える人々がいる。新たな時代に向けてコミュニティ形成と地域の環境や条件に見合うエネルギーをつくりだしていく地に足をつけた暮らしを目指す。その転換点、節目が現在なのかもしれないと考えている。

近江学研究所主催公開講座・近江学フォーラム会員限定講座　報告

成安造形大学附属近江学研究所

近江学研究所主催公開講座・近江学フォーラム会員限定講座　報告

成安造形大学附属近江学研究所

Name:

Omi Multicultural Institute

Title:

2019 Report on Public Lectures Hosted by the Omi Multicultural Institute

Summary:

Each year Omi Multicultural Institute holds public lectures for the dissemination of information regarding the culture of Omi. Here I will report on lectures 158 to 168, which were held between April 2019 and December 2019.

はじめに

近江学は、近江という地域固有の風土を改めて検証する学問です。

20世紀後半の日本人は、大量消費・大量廃棄の暮らしをひたすら追い求め、優れた素材や技術、豊かな暮らしの知恵や自然観を切り捨ててきました。

この50年間に私たちが失ったものに思いをめぐらせ、過去の記憶を手がかりに、ごく当り前のものの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、本来の豊かさを未来に向けて再生しなければなりません。文化とは人の営み、すなわち「暮らしのかたち」のことです。

近江学研究所では、豊かな文化資源に恵まれた近江を多角的にとらえるために「近江学」と名付けた講座を開講しています。本稿では、平成31年・令和元年（2019）年度に開講した158回～168回までの講座概要を報告します。

※1～142回の講座概要は、近江学研究所発行の文化誌「近江学」創刊号～10号に、143～157回の講座概要は、近江学研究所紀要第8号に記載しています。

2019年度近江学パンフレット表紙

●第158回

特別公開講座

「日本の食とお茶　―近江の食文化にからめて―」

日時：4月27日（土）14：00～15：30

場所：コラボしが21　大会議室

講師：熊倉　功夫　氏（MIHO MUSEUM館長、国立民族学博物館名誉教授）

2019年度特別公開講座は、2013年「和食：日本人の伝統的な食文化」としてユネスコの無形文化遺産登録にご尽力された熊倉功夫氏をお迎えし開催しました。

講演では、私たちにとって「和食」とはなにかをお話しいただきました。古来から自然の中に存在する霊的なものと人との交信のかたちとして「行事食」があることを「花見」から読み解かれ、そこには日

本人のもつ移ろいゆく自然を尊重する姿、恵みに対する感謝の気持ちが表れていること。また、鎌倉初期から始まった茶の湯文化が生み出した「懐石」にもある一汁三菜が、今の家庭料理につながっていること。「家庭料理」は、旬のものを食べ、つくる人が食べる人の顔を思い浮かべてつくられること。それが「食文化の原点」として一番大切な姿であることが話されました。

講座の後半では、熊倉氏とともに4月初頭に大津市仰木地区へ訪れ、仰木のハレの食事を取材した様子を本研究所加藤副所長がスライドで報告しました。熊倉氏からは、納豆餅という滋賀県内では他の地域に見られない独特の食文化に驚いたというエピソードが紹介され、近江には各地に家庭の中に生きている郷土料理・和食の文化があり、それは、とても価値があることで、ぜひ後世に引き継いでほしいと語られました。ほぼ満席の約150名の受講者から、大変満足度の高い感想をいただきました。

2019年度特別公開講座チラシ

講演風景

熊倉功夫氏

●第159回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―食のかたち―料理が伝える文化とは!?」

日時：5月18日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：川西　豪志　氏（株式会社木馬代表取締役、ひさご寿し料理長）

対談：石川　亮　（本学准教授・本研究所研究員）

水郷と商家の街、近江八幡市で地元の食材をふんだんに使う料理人、寿し割烹と日本料理を楽しませる「ひさご寿し」2代目川西豪志氏をお迎えしました。本研究所の石川亮研究員がナビゲートする対談形式で講演を行いました。世界的に和食の注目度は高く、その理由に「和食：日本人の伝統的な食文化」が無形文化遺産に登録されたことは大きい。登録された当時、川西氏はフランスの宮殿で外務省の方々に懐石料理を振る舞うメンバーとして参加され、またその2年後に開催されたミラノ万博でも、日本食チームの一人として日本食を世界に広めるために参加された。それをきっかけに、講演ではなぜ日本料理をつくるのか、自分が暮らす土地の食や文化を誇りに思えているか、日本食文化の中で近江料理とは何かを考え、近江八幡の自然環境、生産者や漁師などいろいろな人に地域の食を教わることを始めたというエピソードが語られました。講座の中では、川西氏がこれぞ近江の郷土食と考える「丁子麩の酢味噌和え」が振る舞われ、味覚を通じた食文化の深さを味わう講座となりました。

川西豪志氏

石川亮研究員と対談

●第160回

「淡海の夢2019　仰木・棚田山写生会」

日時：6月8日（土）9：30～17：30

場所：大津市仰木周辺

講師：永江　弘之（本学教授・本研究所研究員）、待井　健一（本学非常勤講師）

琵琶湖を中心とした棚田・里山、湖国の風景は今、次世代に引き継ぎたい美しく貴重な日本の原風景として広く注目されています。「淡海の夢」は、年2

回の写生会と公募風景展を通して、近江の素晴らしさを体感し固有の価値を再発見する講座です。本学イラストレーション領域で風景イラストを専門とする永江弘之研究員が、風景写生のコツをレクチャーし、講評会を実施しました。

今回の開催地は、大津市仰木地区でした。風が強く天気が目まぐるしく変わり写生には難しい日和となりましたが、3年ぶりに仰木地区で棚田を描けることを楽しみに来られた受講者が集まりました。当日は、仰木活性化委員会に協力いただき受付場所として「ふれあい御所の丘公園」を使用し、講評には仰木市民センターをお借りして実施しました。

大津市仰木地区での写生会風景

仰木市民センターにて開催された講評会の様子

●第161回

近江学フォーラム会員限定講座

「近江と美濃を結ぶ里　―奥伊吹・甲津原」

日時：6月29日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：髙橋　順之　氏（米原市教育委員会歴史文化財保護課主幹、伊吹山文化資料館学芸員）

米原市で歴史文化・資料館運営を通して広く市民に伊吹山の自然・歴史文化について教育普及に努められている髙橋順之氏をお迎えし、国の重要文化的景観「東草野の山村景観」に登録された奥伊吹・甲津原集落について講演いただきました。奥伊吹・甲津原集落は、標高520メートルの高地にあり、西日本屈指の豪雪地として知られており、かつて3本の峠道で湖北と美濃を結ぶ拠点であったことから、顕教踊りや廻り仏、能面などの古い文化や文化財が入り込み、里人によって伝承されてきました。甲津原や坂下の村々が、山深い集落でありながら閉塞した土地ではなく、峠を介した往来がさかんな地域であったことが具体的な事例をもとに語られました。

髙橋順之氏

講演風景

●第162回

近江学フォーラム会員限定講座

「衣生活用具からみる里の暮らし」

日時：7月13日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：須藤　護　氏（民俗学者、龍谷大学名誉教授、龍谷大学里山学研究センターフェロー）

大津市田上牧地区にある田上郷土史料館に収蔵された民具の調査を10年かけて取り組まれている須藤護氏をお迎えし、民具から土地の暮らしを読み解いていただきました。郷土史料館が設立されたのは昭和43（1968）年。収蔵品のうち最も充実しているのが衣生活に関わる資料で、現在80歳から90歳くらいの女性が、田上にお嫁に来るときに持って来られた日常着、作業着、訪問着その他美しい小物類がたくさん保管されています。この豊富な衣生活用具を通して、当時の田上の女性たちがいかに賢い暮らしを築いてきたか、その暮らし方をひとつひとつ解説いただきました。この調査を経て、2019年3月28日に国の登録有形民俗文化財「田上の衣生活資料」として登録されました。地元の方々の継続的な調査への協力が結実し文化財登録につながったと須藤氏は語られました。

須藤護氏

●第163回

近江学フォーラム会員限定講座

「甲賀の神仏　―櫟野寺を中心として―」

日時：9月21日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：髙梨　純次　氏（美術史家、公益財団法人秀明文化財団参事）

近江に現存する秘仏、一般公開されていないものも含め200余点の仏像、神像をカラー写真と文章でまとめた『近江の祈りと美』（2010年、サンライズ出版）を出版された髙梨氏に、甲賀の平安彫刻について講演いただきました。この講座は、10月に行う近江学フォーラム現地研修『甲賀の里をゆく』の事前学習として開催しました。講座では、多くの文化財が伝えられている滋賀県の中でも、甲賀市は本山寺院が多い大津市に次いで、2番目の数量を誇っていること。特に、櫟野寺や阿弥陀寺（甲賀市櫟野）には平安古像が集中して伝えられていることを事例を基に解説いただきました。また、現存する神像や仏像について、近年の研究成果を踏まえながら、見学に際しての見どころなどについてお話しいただきました。

髙梨純次氏

●第164回

「淡海の夢2019　堅田・湖族の郷写生会」

日時：10月26日（土）9：30～17：30

場所：大津市堅田周辺

講師：永江　弘之（本学教授・本研究所研究員）、上原　結子（本学准教授）

今回の開催地は大津市堅田地区でした。堅田は、琵琶湖の水運・漁業など、湖上の特権を持つ堅田衆（湖族）が栄えた歴史ある町。その町並みをはじめ、一休和尚、松尾芭蕉ゆかりの寺院、浮御堂、堅田漁港など、趣深い湖辺の風景が魅力です。今回は、蓮如が真宗の布教拠点として滞在した寺院「本福寺」にご協力を得て、本堂にて受付・講評をさせていただきました。

大津市堅田地区での写生会風景

本福寺本堂で開催された講評会の様子

●第165回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―挑戦のかたち―完全農薬不使用栽培を通してみる、朝宮茶のちから―」

日時：11月9日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：片木　明　氏（茶農家）

対談：真下　武久（本学准教授・本研究所研究員）

信楽の西、国道422号線沿いに店を構える「かたぎ古香園」。6代目当主片木明氏は、昭和50年から朝宮で、お茶の完全農薬不使用栽培を開始し、現在はそのパイオニアとして広く知られています。今回の講座では、片木明氏をお迎えし、「かたぎ古香園」が目指す「安全と安心の徹底した追求」の経緯、また、従来から高級茶として知られている朝宮茶の魅力について語っていただきました。今回は片木氏の意向で、階段式の座席ではなく、講師を取り囲むような車座をつくり、前列はゴザに座布団をしいて、後列は椅子席を用意して、アットホームな環境つくりを試みました。片木氏のお人柄を身近に感じる雰囲気は受講者に好評を得ました。

完全農薬不使用栽培というとてつもない挑戦から見えてくる、朝宮の土地や自然、お茶が持つ「ちから」を片木氏のお話や、茶葉の試食や、全員にふるまわれたお茶を味わうことで、体験を通して感じることのできる講座となりました。

会場風景

会場風景

片木明氏（右）と真下武久研究員（左）

ふるまわれた朝宮茶の紅茶

●第166回

近江学フォーラム会員限定講座

「風景から識る近江　―文学作品を通して―」

日時：11月23日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：西本　梛枝　氏（文筆業、日本ペンクラブ・日本詩人クラブ・観光ジャーナリスト会議等の会員、旅や観光に関した記事・随筆を主に執筆。）

多くの文学作品中に描かれた「文学風景」を、作家のまなざしを想像しながら、その土地をたどっていく醍醐味を西本氏に講演いただきました。本講座では、井上靖『星と祭』、勝海舟『氷川清話』を題材に、文学作品を読み解かれました。「日常の中で〝見なれた風景〟になったその土地を、文学作品が新鮮なものにしてくれることがわかってくる。」「文学作品たちからもらう〝ちょっとしたきっかけ〟は人生を豊かにする」。西本氏の感性豊かな語りから、作家たちが近江の風景からすくい取った近江の豊かさに触れることができた講座となりました。

西本梛枝氏

●第167回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―受け継ぐかたち―信楽勅旨、茶器をつくる―」

日時：11月30日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：大西　左朗　氏（陶芸家）

対談：石川　亮（本学准教授・本研究所研究員）

古くから焼き物の産地として知られる甲賀市信楽町勅旨の陶芸家大西左朗氏の仕事に迫る講座を開催しました。戦後まもなく小物づくりの復興を目指し、先人の仕事を学びながら機能性に優れた独自の作風を確立してきた左朗氏の実父である大西忠左氏のものづくりの精神性について、つづいて、大西左朗氏がその伝統を継承しながらも新素材の研究開発に取り組まれ、近年では朝宮の茶農家と連携するなど、煎茶を美味しく飲むための茶器を追求している制作活動について、また信楽勅旨の歴史に裏付けられた「陶璃窯」の普遍的なものづくりについて語っていただきました。講座の中では、左朗氏自らが、作陶した2種類の茶器でお茶を煎れていただき、前列の方に飲み比べをしていただきました。

また、当日は関連企画として「近江のかたちを明日につなぐ展 vol.13 信楽勅旨、茶器をつくる」を開催しました。忠左氏と左朗氏の作品の数々、陶璃窯の名前の由来となった掛け軸、作品のインスピレーションを受ける室町時代の陶器の破片など、作品の世界観が伝わる展示となりました。

大西左朗氏

お茶を煎れる大西左朗氏

「近江のかたちを明日につなぐ展」

「近江のかたちを明日につなぐ展」

石川亮研究員

「近江のかたちを明日につなぐ展」

●第168回

近江学フォーラム会員限定講座

「里坊―律院の庭園と西教寺本堂大壁画」

日時：12月14日（土）10：50～12：20

場所：成安造形大学　聚英ホール

講師：加藤　賢治（本学准教授・本研究所副所長）

ゲスト：木村　至宏（本学名誉教授・本研究所顧問）

文化誌「近江学」11号、テーマ「里のいとなみ」の中で、発表した講座タイトルと同名の論考について、筆者である加藤副所長が解説しました。「門前町坂本には名勝庭園を有する里坊が点在するが、その作庭の背景には、比叡山で厳しい修行をしてきた僧侶のある種の悟りに近い思想が流れているのではないか。」また、「西教寺の本堂にある日本画家三輪晁勢が描いた大壁画は、江戸時代初期の禅僧沢庵禅師が西教寺を訪れた時に、詠んだ詩がもとになっている。」と解説した後、ともに自然の中に人間が溶け込み、草木も動物も安らかに暮らす浄土を表しているのではないかと里坊と壁画の共通点をまとめました。そして最後の20分、西教寺の話のつながりということで、木村至宏顧問が、西教寺を菩提寺とする明智光秀の人柄を西教寺に残る古文書や、木像、梵鐘などの資料を紹介しながら解説しました。受講者からは、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公の舞台をしっかり学ぶことができ満足でしたという感想が多く聞かれました。

会場風景

木村至宏顧問

加藤賢治副所長

編集後記

本紀要では本学研究員からの論考２編と、近江学研究所主催の公開講座・近江学フォーラム会員限定講座の報告１編を掲載します。

加藤研究員の論考は、少子高齢化などの現代的課題を抱える中で近年地域の核として活発に活動している２つの寺院の取り組みを紹介し、将来社会における社寺の可能性を考察しています。石川研究員は、近江の４つの地域をめぐって出会った独特な魅力を掘り下げて「近江の懐をめぐる３」というかたちで紹介しています。「講座の報告」では、平成31・令和元（２０１９）年度に開講した１５８回～１６８回までの講座概要を報告しています。

本号発行予定の３月現在、新型コロナウィルスの流行のニュースが連日報道されています。非日常的な事態によって社会の基盤がゆらぎ不安が広がる中で、人々の心をつなぎ支えるものについて考えさせられます。本研究所では、近江に内在する普遍的な美やかけがえのない価値などにつながるような研究を今後も積み重ねてまいります。よろしくお願いいたします。

編集担当　永江弘之

成安造形大学附属近江学研究所
紀要　第９号

発行日　令和２年３月18日
発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学
附属近江学研究所
〒５２０-０２４８
滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　０７７-５７４-２１１８
発行者　西久松吉雄
編　集　成安造形大学附属近江学研究所
印刷所　株式会社 北斗プリント社

© Seian University of Art and Design 2020
ISSN 2435-4279